

新春対談 2006 「デザイン研はどこへゆく」

西村・北沢両教授、研究室体制を語る



「近くて遠い」—居室を隣にしなが、多忙ゆえのすれ違いが多く、滅多に同席の機会がない—両教授の、歴史的対談が初めて実現。年の瀬、「師走」ということばそのままのタイトなスケジュールに追われる両先生、たまさか揃って空いたエアポケットのような時間に、マガジン編集部がお邪魔した。

10分あまりのわずかな時間に、来年度の研究室体制への展望と意気込みが大いに語られたのであった。

なお、同対談後に、西村教授には単独会見を行い、忘年会スピーチでもふれられた（裏面記事参照）ベルク・プロジェクトの今後についてうかがった。その模様は次号に掲載予定。

（取材日：2005年12月22日・聞き手：坂内良明）

マガジン（以下、マ）：来年度は、いよいよ柏の新領域・北沢研究室の本格オープンとなりますね。

北沢教授（以下、北）：来年度は、院生4人でスタートする。工学系も兼担するのでこの部屋（北沢研究室）は残し、学部講義（「都市デザイン概論」）や演習、都市デザイン研究室会議への参加や院生の指導も行う。忙しさが2倍になりそうだね。

マ：柏とこちら（工学系）の協働体制はどうなりますか。

北：今学期も大学院（新領域）演習で「柏の葉キャンパス・タウン計画」を課題にしているが、新領域の院生に加えて、都市工・建築の学生も参加している。柏では、1人の教員につく院生が少ない。マスターが4人×2、ドクターが多くても2人程度、一ケタに収まる数だね。

西村教授（以下、西）：まあ、都市工、中でもうちの研究室が例外的に（研究室あたりの）院生が多いんだよね、伝統的に。院進学の際に研究室の定員が決まっていなくても他所から見れば珍しい。けれども昔、つい10年くらい前までは、卒論の指導教官選びさえも全く人数の枠がなかった（現在教授・助教授の人数×3+1人の定員あり）。学生のニーズに柔軟に答えるリベラルさと言えるが、今はそれを「放置主義」と捉える趨勢があるね。

■北沢教授来年おとしさ2倍

マ：これまでは、研究室「持ち回り」式に、柏（新領域）に教員を「供出」という印象もありました。

北：やはり「キャンパス」という実体がなかったから。いよいよ工事中の新校舎（環境系）ができて、3月に引越し、5月には開校となれば、学融合をめざす研究・教育が本格化すると思う。

マ：北沢先生が去ることで、

来年度新スタッフ（都市工学専攻では助教授職1名を公募中）によっては、設計・デザイン系の水脈が途絶えてしまうのではないかと懸念する向きもあります。

西：新スタッフについては、私が応募窓口になっている。人選の行方はまだよく分からない。うち（デザイン研）のスタッフという位置づけではないから、結果的にうち（デザイン研）のスタッフが1名減るかたちとなる事態もあり得る。ただ、先ほどから言っているように、北沢さんがこちらから手を引くということではないから、デザイン系が弱くなるとかそういう予測は当たらない。

北：そうそう。柏で開講する環境デザインのスタジオでは、建築・都市計画のほかに自然・農村計画・ロボット工学などのデザインも広く手がける。デザイン研や都市工、他学科、他学科の学生にも取ってもらいたいね。

マ：大学改編の荒波をかぶりながらも、来年度もデザイン研の西村-北沢体制は維持されるということですね。今日はお忙しいなかどうもありがとうございました。



■西村教授「来年来るのは誰か」

「世界へ」と完全徹夜になった忘年会（12月15日・鳳明館森川分館）

時間を喪失した忘年会と形容されるほど今年の研究室忘年会は、「君たちの研究活動が国際的な場でリードできることを証明していこう」と情熱的に進む西村教授のスピーチに高揚し、次いでジャンケンによる西村教授提供の書籍福引があり、果てしない先輩後輩の歓談に移っていった。参加者は40人を数え、散会は午前5時だった。

研究室会議後、忘年会は8時から大学近くの鳳明館森川分館の畳敷き大広間で始まった。たまたま当日発行の「ベルク本郷ツアー、資料集制作および特別講義」について報じた都市デザイン研マガジン16号が全員に配られ、生まれ月ごとに着席した席から、生まれ日順で恒例の一分スピーチ「今年の自慢、来年の抱負」を行った。

最後に北沢教授の「4月から新領域に移ったが、社会文化系も加わって、考古学からロボットまでの議論がおもしろい。都市デザインは何をすべきか、原点から考えていきたい」というスピーチに次いで、西村教授は集大成の都市保全計画に関連して、「今年は都市保全計画授業の実況中継を兼ねた酒井研究生の『西村幸夫「都市保全計画」&研究室ホームページ「新年職講話」を4年生にプレゼントできた」と述べてから、ベルクまちあるき資料集について「短期間ながら、皆の知恵を結集することでいい成果を得られた。この経験を応用して今後、何十年も使えるもの、子らにも分かるものを作っていきたい」と院生たちの労をねぎらった。さらに、「小さな町のことで真剣に研究すれば、それが国際的な世界に広がる。“名人”がそうであるように、何か打ち込むことは自分を育て世界へと通じる。君らのしていることは、国際的な世界でリードできるものだ。自信をもって修行してほしい」と檄を飛ばした。



■ジャンケン福引で宴の熱は最高潮に

第5回研究室会議

第5回研究室会議は、12月15日17時から19時半まで開かれた。マレーシアのアイディッド Idid 先生に同伴して来日していた学生の自己紹介につづき、研究発表が行われ、そのあとそろって忘年会に繰り込んだ。発表はル・クウィン・チー「TRADITIONAL VILLAGE IN THE FRINGE OF HANOI」、田辺康弘「近隣商店街に於ける滞在型商店街としての再生の可能性に関する研究」、伊藤晃久「木造密集市街地における介護まちづくり」、大谷剛弘「商店街組織の変容にみる近隣型商店街と地域の関係の検討」、戸田惣一郎「伝統的温泉地と温泉の現代的関係」で、いずれもM2である。



■「大黒屋のばあちゃん」を囲んで

大野村再訪記 (OB 中村 元)

就職して早3年が過ぎようとしている昨年12月、修了して以来、初めて、同期4名で「大野村」へ行ってきた。突然の訪問だった上に、陽も落ちた夕刻に到着したにもかかわらず、村の方には本当に温かく歓迎していただき、在学時から感じていた農村ならではの「温かさ」を改めて実感した。「寒波」までも、時期を早めて歓迎してくれたのには参ったが…。

いまや、東京の街中で、人の本当の「温かさ」を感じることのできる“場”はほとんどない。自然のルールに逆らうことの愚かさを、身を持って学んできた農村だからこそ、人の「温かさ」やゆったりした時間の流れを当たり前のように享受できるのだろう。そのような「温かさ」を演出・提供する“場”の創出こそが、一人一人の明るさを増幅させ、町中へあふれ出させ、農村ならではの賑わいを創出できるのではないだろうか。そのためにも、合併しても、これまでに築いてきたポケットパークや豆風鈴、児童館などの“場”の活用が継続されることを期待したい。

また、突然の訪問にもかかわらず、色々ともてなして下さった役場や推進部会の方々の自然な笑顔や、扉越しに「きょとん」としながらも歓迎してくれた大黒屋のばあちゃんのかわいらしい笑顔を忘れることはないだろう。また、村に行かなくては…「大野村」という名前がなくなっても、「おおの」の人も場所も、何ら変わることはないのだから…。

(編集部注) 今回の訪村は中村氏ほか田中暁子、平井朝子、羽藤和紀の3氏。1週間後の12月18日、大野村「閉村式」が行われた。

編集後記

「聖域なき」年末大掃除(12月29日)で心もち広く見えるようになった院生室は、五月雨式の院生帰省で短い閑散期を迎えた。年明けには、2月の修論締め切りに向けてM2は本格追い込み、プロジェクトも年度納めにに向けて再始動する。嵐の前の静けさ、といった趣きの年末年始。今年のデザイン研マガジンも、激流のような研究室活動に乗り遅れることなく、これをタイムリーにキャッチし配信してゆくつもりです。ご愛顧、ご協力お願いいたします。(坂内)